

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

日本語におけるモンゴル語からの借用語：  
母音の音韻変化に着目して

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 國學院大學大学院文学研究科<br>公開日: 2025-05-21<br>キーワード: 借用語, 日本語, モンゴル語, 音韻変化<br>作成者: 金, 正琳<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002001634">https://doi.org/10.57529/0002001634</a>                                  |

# 日本語におけるモンゴル語からの借用語

## —母音の音韻変化に着目して—

### Mongolian Loanwords in Japanese:

#### Focusing on phonological changes in vowels

金正琳

キーワード：借用語 日本語 モンゴル語 音韻変化

Key Words: loanword Japanese Mongolian phonological change

### 要旨

日本語には借用語が多く存在し、借用元の言語と日本語の音韻構造が異なる場合、日本語の特徴に合わせるため、さまざまな音韻変化が生じる。本稿はこのような音韻変化に着目し、特に母音の変化特徴を明らかにするため、日本語におけるモンゴル語からの借用語を研究対象とし、借用過程に見られる母音の音韻変化について調査を行った。その結果、母音の音韻変化は母音対応、母音挿入、母音削除の3種類に分けられることを明らかにした。母音対応は母音の弁別素性と関わり、/a→a/、/ɔ→e/、/i→i/、/ɔ, u→o/、/ø, u→u/ (モンゴル語→日本語)の対応が観察される。母音挿入はCVC音節の尾子音直後に現れ、挿入される母音は基本的に先行研究の指摘と同じであるが、調査語の中国語発音やモンゴル語の文字と音声の乖離という特徴に影響される場合もあり、異なる特徴を示している。母音削除はほぼ語末の長母音に現れ、音節の有標性制約が関係していると考えられる。

### Abstract

The Japanese language features many loanwords. When the phonological structure of the borrowed language differs from that of Japanese, various phonological changes occur to adapt to the characteristics of Japanese. This study focuses on such phonological changes and investigates the phonological changes in the vowels of loanwords from Mongolian to Japanese to elucidate the characteristics of these vowel changes. The results revealed that these changes can be classified into three types: vowel matching, vowel epenthesis and vowel deletion. Vowel matching is related to the distinctive features of vowels. This study observes correspondences such as /a→a/, /ɔ→e/, /i→i/, /ɔ, u→o/ and /ø, u→u/ (Mongolian→Japanese). Vowel epenthesis then immediately occurs after the final consonant of a CVC syllable in which the inserted vowel is the same as that mentioned in previous studies. However, it may display different characteristics due to the influence of the Chinese pronunciation of the surveyed words and the characteristics of the discrepancy between the written and spoken language of the Mongolian.

Vowel deletion nearly exclusively occurs in word-final long vowels, which may be related to the markedness constraints of syllables.

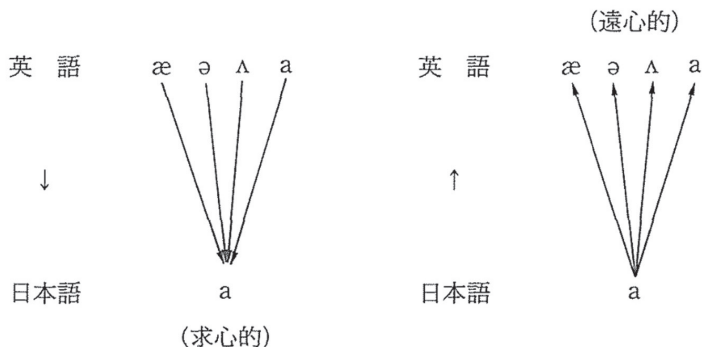
## 一、はじめに

日本語は借用語の多い言語であり、「アイスクリーム」、「ミルク」、「クリスマス」のような英語からの借用語は日常生活に頻繁に使用されている。そうした中、社会の発展や文化交流が進むにつれて、英語以外のさまざまな言語も日本語に借用されている。例えば、中国語からの借用語として「チンジャオロース」、「マーボー豆腐」などが存在する。外国語が日本語の借用語として借用される場合、借用語適応 (loanword adaptation) という現象によって、母音や子音の変化が発生する。特に、日本語は母音で終わる開音節言語であるため、借用元の言語に子音で終わる閉音節が存在する場合、母音挿入や母音削除が一般的に生じる。例えば、日本語の音節は拗音(ん)と促音(っ)以外、ほとんどが「子音(C) + 母音(V)」の構造を持ち、CVという軽音節で構成される。一方、英語などの言語においては、音節構造がCV以外にCVCという重音節構造、さらにCCのような子音連続構造も許される。日本語には存在しない、より複雑な音節構造が借用される場合、日本語が許容する音節構造に合わせるため、さまざまな母音の変化が生じるのである。本研究はこのような母音の音韻変化に着目し、日本語におけるモンゴル語からの借用語の特徴を明らかにすることを旨とする。

## 二、先行研究と問題提起

日本語において、英語などヨーロッパからの借用語は特に注目され、多く研究されてきた。国立国語研究所(2019)は英語からの借用語を対象として、その音声・音韻の変化について詳しく述べている。英語の母音数は日本語より多いので、英語で意味の弁別に使われるいくつかの母音音素が、日本語で1つの母音音素に統合される。図1のように、英語が日本語化される場合、英語の母音と日本語の母音の関係は求心的であり、逆の場合は遠心的である。具体的には、英語の母音がそれぞれ /æ, a, ə, ʌ → a/, /i → i/, /u → u/, /e → e/, /o, ɔ → o/ のように日本語化する(英語 → 日本語)。

図1 日本語と英語の母音の比較 (国立国語研究所 2019, p52)



(1)を見ると、英語の/bæθ/は日本語で/basuu/になり、/æ→a/の対応が見られる。英語の/skɔ:rt/は日本語で/sukaato/になり、/ə→a/として対応される。

(1) bath /bæθ/ → バス /basuu/      skirt /skɔ:rt/ → スカート /sukaato/

また、借用語の開音節化について、母音を子音の後に挿入する、あるいは、子音と子音との間に挿入することが要求されると述べている。挿入される母音は原則的に/u/であるが、子音/t, d/のような歯茎音の後には母音/o/が使われ、子音/g, dʒ/のような破擦音には母音/i/が使われるのが普通である。(2)のように、ミルクの/r, k/の後に/u/が挿入され、ベンチの/g/の後に/i/が挿入される。/t/の後に/o/が挿入される例として、(1)のスカートを参照できる。

(2) milk /milk/ → ミルク /miruuku/    bench /benʃ/ → ベンチ /benʃi/

日本語における借用語の音声・音韻の特徴を全体的に分析したのはKubozono (2002)であり、借用語の音節構造、アクセント、語形成などについて詳細に述べている。同研究によると、日本語の借用語における母音挿入は、閉音節の開音節化や子音連続を回避するために起こる現象であることがわかる。また、窪蘭 (1999)では、日本語の外来語に挿入される母音は聞こえ度と関係し、母音 /u/ は狭母音であり、聞こえ度が最も低いとされることから、母音性が最も低いと指摘

している。そして、子音 /ʃ, dʒ/ の後ろに挿入される母音 /i/ と子音 /t, d/ の後ろに挿入される母音 /o/ も狭母音性を持ち、聞こえ度が低いいため、挿入母音として選ばれやすいとしている。

他には、澤田 (1985)、日比谷 (2000)、大滝 (2012) などは日本語の借用語の母音挿入について調査を行い、その中で大滝 (2012) は最適性理論 (OT) を用いて分析を行っている。また、大江 (1969) は日本語借用語における母音呼応、つまり英語と日本語の母音対応を分析している。

以上のように、日本語の借用語における母音挿入、母音対応などの現象は多くの研究者によって研究されてきたが、問題点も存在する。今までの研究対象はほぼ英語などのヨーロッパからの借用語に絞られており、他の言語からの借用語はどうなっているかはまだ明らかではない。例えば、モンゴル語からの借用語として、「モンゴル (蒙古)」、「ゲル (移動式住居)」、「スーホの白い馬 (スーホは男性の名前)」などが挙げられるが、これらについての先行研究は、管見の限り見当たらない。よって、本研究の目的はモンゴル語からの借用語を研究対象とし、日本語として借用される場合に起こった母音の音韻的変化について考察することである。

### 三、調査と分析

#### (一) 調査対象

本研究の調査対象は日本語におけるモンゴル語からの借用語211例である。モンゴル語は使用範囲によって、およそ2種類に分けられ、中国の内モンゴル自治区で標準語として使われるチャハル方言とモンゴル国で標準語として使われるハルハ方言である。両方言の文法はほぼ同じであるが、発音には違いが存在する。(3)を見ると、「花」という単語はチャハル方言とハルハ方言でそれぞれ /tʃʌtʃʌg/、/tsetse/ と発音され、母音と子音は異なる (tʃʌ と tse)。借用する方言の発音特徴によって、日本語借用語の音素対応も異なり、それぞれ「チェチエグ」と「ツェツエグ」になっている。

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| (3) チャハル :        | ハルハ :            |
| /tʃʌtʃʌg/ → チェチエグ | /tsetse/ → ツェツエグ |

しかしながら、両方言では発音が同じである単語も多く存在し、日本語の借用語から元方言を弁別するのは容易ではない。モンゴル国で使われるハルハ方言と区別し、借用元の言語を内モンゴルのチャハル方言に絞るため、本研究の調査対象は中国内モンゴルのモンゴル語人名に限定した。つまり、調査語211例はすべて日本で実際に使用されている内モンゴルのモンゴル族の名前である。

## (二) 調査方法

調査語は主に日本の公式ホームページ、論文、著作、周りの人(内モンゴルのモンゴル族)の名前の日本語借用によって集められた。同じ調査語の日本語借用パターンは異なる場合もあるが、より慣用的な借用パターンを選んだ。例えば、人名の/sornaa/は日本語で「ソリナ」と「ソヒナ」の2パターンで借用されていることを発見したが、実際の調査で「ソリナ」は5回現れ、「ソヒナ」は1回しか現れなかったため、より慣用されている「ソリナ」を調査語として選択した。このように、調査語211例を選出し、それぞれのモンゴル語の発音を発音辞典、また本人によって確認した。そして、これらのデータを基にして、母音の変化を観察した。

日本語の母音は/a, i, u, e, o/の五つであるのに対し、モンゴル語の母音は/a, ə, i, ɔ, ʊ, e, u/の七つである。英語と同じように、モンゴル語の母音と日本語の母音の関係は求心的である。また、モンゴル語も閉音節言語であり、子音で終わる音節(CVC)と子音連続(CC)が許される。日本語に借用される場合、母音挿入と母音削除が現れる可能性があるため、これらについても調査した。

## (三) 調査結果

調査結果は母音対応(vowel matching)、母音挿入(vowel epenthesis)、母音削除(vowel deletion)という3種類に分けられる。

まずは、母音対応について、表1のような対応関係が観察された。四角形で囲まれている数値は各モンゴル語の母音に対応する日本語の母音の割合が最も高いものである。例えば、モンゴル語の母音/a/は96%で日本語の母音/a/とマッチされ、/a→a/ (モンゴル語→日本語)の対応はデフォルトパターンとして扱われることができる。

表1 モンゴル語と日本語借用語の母音対応

| 日\モ | a          | ə         | i         | ɔ         | u         | ø         | u         |
|-----|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| a   | 96%(137)   | 0% ( 0)   | 9% ( 7)   | 0% ( 0)   | 17% (13)  | 0% ( 0)   | 0% ( 0)   |
| i   | 1% ( 2)    | 14% ( 7)  | 80%(61)   | 0% ( 0)   | 1% ( 1)   | 0% ( 0)   | 0% ( 0)   |
| u   | 3% ( 4)    | 12% ( 6)  | 1% ( 1)   | 9% ( 4)   | 32% (23)  | 76%( 9)   | 77%(36)   |
| e   | 0% ( 0)    | 72%(37)   | 9% ( 7)   | 2% ( 1)   | 0% ( 0)   | 8% ( 1)   | 21% (10)  |
| o   | 0% ( 0)    | 2% ( 1)   | 1% ( 1)   | 89%(42)   | 50%(37)   | 16% ( 2)  | 2% ( 1)   |
| 総計  | 100% (143) | 100% (51) | 100% (77) | 100% (47) | 100% (74) | 100% (12) | 100% (47) |

モンゴル語の母音と日本語の母音は基本的に /a→a/、/ə→e/、/i→i/、/ɔ, u→o/、/ø, u→u/ のように対応できる。(4a~g) はその具体例である。母音対応のデフォルトパターンの割合がすべての母音においては半分以上を占めているが、母音 /u→o/ の割合が最も低く、50%しかない。つまり、モンゴル語の母音 /u/ は基本的に日本語の母音 /o/ と対応しているが、揺れも少なくない。

- (4) a. /altan/ → アルタン /arutan/      b. /ərdən/ → エリデニ /erideni/  
 c. /imin/ → イミン /imin/              d. /onon/ → オノン /onon/  
 e. /ɔjɔŋg/ → オヨンガ /oyonga/      f. /ølgii/ → ウルギー /uurugii/  
 g. /surlig/ → スルリグ /sururigu/

続いて、母音挿入と母音削除を表2で示すと、前者は総計283例であるのに対し、後者は36例現れ、削除より挿入が圧倒的に多いことがわかる。母音別で見ると、/u/ は最も多く挿入され、/a/ は最も多く削除されている(四角形で囲まれている部分)。

表2 日本語借用語の母音挿入と母音削除

| 種類\母音 | a       | i        | u        | e      | o        | 総計         |
|-------|---------|----------|----------|--------|----------|------------|
| 挿入    | 8% (22) | 9% (26)  | 65%(183) | 3% (9) | 15% (43) | 100% (283) |
| 削除    | 64%(23) | 11% ( 4) | 14% ( 5) | 0% (0) | 11% ( 4) | 100% ( 36) |

母音挿入は基本的にCVC音節の尾子音直後に現れ、先行する子音と関連性が見られる。表3の太線で囲まれている部分を見ると、母音 /u/ が最も頻繁に挿入

され、先行する子音が /t, d/ の場合、母音 /o/ が挿入されていることがわかる。つまり、先行研究の指摘と同じ結果が得られた。具体例を (5) で示す。

表3 日本語借用語における母音挿入

| 前C \ 母音 | a  | i  | u   | e | o  | 総計  |
|---------|----|----|-----|---|----|-----|
| k       | 0  | 0  | 6   | 1 | 2  | 9   |
| s       | 1  | 1  | 10  | 0 | 1  | 13  |
| t       | 1  | 1  | 0   | 0 | 23 | 25  |
| n       | 1  | 6  | 0   | 1 | 0  | 8   |
| h       | 0  | 1  | 12  | 1 | 2  | 16  |
| m       | 0  | 0  | 8   | 0 | 0  | 8   |
| r       | 4  | 11 | 118 | 4 | 1  | 138 |
| g       | 13 | 0  | 20  | 1 | 2  | 36  |
| d       | 2  | 4  | 0   | 0 | 9  | 15  |
| b       | 0  | 2  | 8   | 1 | 3  | 14  |
| p       | 0  | 0  | 1   | 0 | 0  | 1   |
| 総計      | 22 | 26 | 183 | 9 | 43 | 283 |

(5) /unir/ → ウニル /uniruu/      /nadmid/ → ナドミド /nadamido/

今回の調査語において、母音挿入が起こる条件に満たす /ʃ/, dʒ/ が現れなかったので、/ʃ/, dʒ/ には /i/ が使われるという先行研究の指摘を検証できない。また、例外として、子音 /n, r/ の後に母音 /i/ が挿入されるパターンと子音 /g/ の後に母音 /a/ が挿入されるパターンも数カ所現れた (表3で下線を引いている部分)。

最後に、母音削除は (6) の通り、主に語末の長母音が短母音化する現象として現れている。具体的に、/maa/ は /ma/ になり、/xuu/ は /ho/ になっている。これは先行研究であまり言及されていない特徴である。

(6) /badmaa/ → バトマ /batoma/      /saidʒirxuu/ → サイジラホ /sajjiraho/

## 四、考察

### (一) 母音対応

以上の調査結果によると、モンゴル語の母音と日本語の母音は基本的に /a→a/、

/ə→e/, /i→i/, /ɔ, ʊ→o/, /e, u→u/のように対応している。その原因を弁別素性 (distinctive feature) によって解釈することを試みる。Fromkin, V., Rodman, R., & Hyams, N. (2002) によると、弁別素性は分節音の対立を説明する音声特性のことであり、すべての母音と子音は弁別素性によって特徴が付けられる。例えば、音素が鼻音性を持つならば、[+nasal]と、持たなければ[-nasal]と表記する。

大滝 (2011) を参照し、日本語の母音素性を表4でまとめる。[±front]は前舌性、[±high]は狭母音性、[±low]は広母音性を示す。モンゴル語の母音には、円唇性に関わっているので、[±round]の円唇性という素性も入れた。

表4 日本語母音の弁別素性

| 種類    | a | i | u | e | o |
|-------|---|---|---|---|---|
| round | - | - | - | - | + |
| front | - | + | - | + | - |
| high  | - | + | + | - | - |
| low   | + | - | - | - | - |

モンゴル語について、白音門徳 (2014) を参照し、表5でまとめる。表4と同じように、[±round]、[±front]、[±high]、[±low]の4つの素性によって分類される。

表5 モンゴル語母音の弁別素性

| 種類    | a | i | ə | ɔ | ʊ | ø | u |
|-------|---|---|---|---|---|---|---|
| round | - | - | - | + | + | + | + |
| front | - | + | - | - | - | - | - |
| high  | - | + | - | - | - | + | + |
| low   | + | - | - | - | - | - | - |

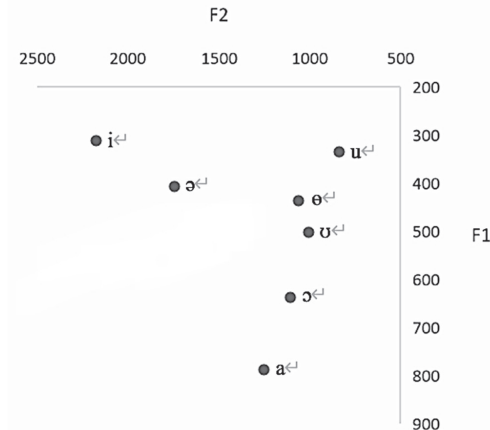
三間 (2014) は、「弁別素性が多く一致するものほど変化しやすい」と述べている。これに基づいて、表4と表5における日本語とモンゴル語の母音の素性を比較すると、まず母音/a/の素性は[-round, -front, -high, +low]、母音/i/の素性は[-round, +front, +high, -low]ということで、日本語とモンゴル語で完全に一致する。そのため、両言語の母音は互に対応することができる。また、モンゴル語の母音/ɔ, ʊ/と日本語の母音/o/も[+round, -front, -high, -low]のように、素性がすべて一致するので対応できる。

一方、モンゴル語の母音 /e, u/ は日本語の母音 /o, u/ とそれぞれ3カ所一致する。具体的には、モンゴル語の母音 /e, u/ は日本語の母音 /o/ と [+round, -front, -low] で一致し、日本語の母音 /u/ と [-front, +high, -low] で一致する。そして、第三節の調査結果によると、/e, u → u/ はデフォルトパターンである。これについて、三間 (2014) では、「重要な弁別素性が共通しているものは変化が生じやすい」と指摘している。母音に関する素性において、舌の前後と舌の高低は最も重要であり、[±round] よりも [±front]、[±high]、[±low] は決め手になる。モンゴル語の母音 /e, u/ は日本語の母音 /u/ とより重要な素性で一致するため、対応しやすいことが考えられる。

残りのモンゴル語の母音 /ə/ はすべての素性に [-] を示し、中央性が高い母音なので、日本語のどの母音と対応しても問題ないようである。しかし、日本語の /e/ 以外の母音はすべて対応できる母音が見つかったので、母音 /ə → e/ の対応が最も理想的である。

モンゴル語の母音 /u/ は基本的に日本語の /o/ と対応するが、例外として32% (表1) の高い割合で日本語の母音 /u/ と対応していることが観察された。モンゴル語の母音 /ə, u/ は素性が一致するが、図2のモンゴル語母音空間図によると、母音 /u/ の位置が明らかに母音 /ə/ より高く、狭母音性が高い。こうすると、母音 /u/ は母音 /ə/ に比べ、[+high] の特徴を持ち、日本語の母音 /u/ と近づいてしまい、結局 /ə → u/ の対応もある程度で起こったと考えられる。

図2 モンゴル語の母音空間図 (金2024, p12)



## (二) 母音挿入


母音挿入は主にCVC音節の尾子音直後に現れ、挿入される母音は先行研究の指摘とほぼ同じである。前述のとおり、日本語は開音節言語であり、拗音(ん)と促音(っ)を除くと、音節が常に母音で終わる。これに対し、モンゴル語では閉音節が一般的な構造であり、語頭以外はほぼ子音で終わる。モンゴル語からの借用語を日本語の音節構造に合わせるため、母音挿入が必要とされる。挿入される母音は先行する子音の素性によって異なり、子音/n, r/の後に母音/i/、子音/g/の後に母音/a/が挿入される例も観察された。(7)において、モンゴル語の/sornaa/は日本語でソリナ/sorina/と借用されている。子音/r/の後に母音/u/が挿入されるのは普通だが、ここで/ri/になっているのは、中国語の影響だと考えられる。

(7) /sornaa/ → ソリナ/sorina/

内モンゴルのモンゴル族はほとんどがバイリンガルであり、モンゴル語の名前には中国語訳がある。例えば、モンゴル語の/sornaa/は中国語で「苏日娜」/surina/と発音され、子音/r/に母音/i/が続く。このような中国語の影響を受け、日本語で/ri/と借用した可能性がある。あるいは、ソリナ/sorina/は完全に中国語からの借用語である可能性も高い。(8)におけるソロンガ/sorongga/の/ga/も同じように、中国語の発音である「苏伦嘎」/sulunga/に影響されていると考えられる。

(8) /solong/ → 苏伦嘎/sulunga/ → ソロンガ/sorongga/

もう一つの特徴として、モンゴル語の文字と音声の乖離も借用語に適用されている。内モンゴルでモンゴル語の伝統的な縦書き文字が使用され、書き言葉と話し言葉は完全に一致しない場合がある。(9)を見ると、書き言葉のagola(縦書き文字の転写)は話し言葉で/u:l/と発音される。日本語では、書き言葉に基づいたアクラ/akura/が使用され、日本語には存在しない/u:l/という超重音節語(VVC)を、書き言葉に戻して借用している。このような現象はあまり多くないが、非常に興味深いところである。

(9) 書き言葉： agola → 話し言葉：/ɑ:l/ → アクラ /akura/

### (三) 母音削除

母音削除はほぼ語末の長母音に現れている。清格爾泰 (1991) は、モンゴル語の語頭以外では軽音節が存在できないと指摘している。語中と語末の軽音節の母音は発音において、ほぼ脱落するか長母音化するのが一般的である。(10)における書き言葉の *dorona* (縦書き文字の転写) は話し言葉で *dor<sup>naa</sup>* になり、第二音節の母音 /ɑ/ が脱落し、第三音節の母音 /a/ が伸長する。日本語に借用される場合、伸長された語末の /aa/ が脱落して短母音化している。

(10) 書き言葉： dorona → 話し言葉：/dor<sup>naa</sup>/ → ドリナ /dorina/

Gordon (2016) では、音節には有標性があると主張している。つまり、CV 音節は通言語において最も一般的で、無標な音節である。日本語には長母音が一般的に存在するが、借用語において、より無標な CV 音節が優先され、母音削除が起こる。(10)において、長母音の /naa/ という CVV 音節より、/na/ という CV 音節がより無標である。このように、母音削除には、音節の有標性制約が観察される。

## 五、おわりに

本研究はモンゴル語からの日本語借用語 (人名) を用いて調査を行い、母音の音韻的变化について考察した。母音対応は基本的に /a→a/, /ɑ→e/, /i→i/, /o, u→o/, /ø, u→u/ であり、弁別素性によって解釈できる。母音挿入は先行研究の指摘とほぼ同じであるが、中国語の影響や文字と音声の乖離によって、異なるパターンも現れている。母音削除は語末の長母音が短母音化する現象として現れ、音節の有標性制約と関連性が見られる。

今後の課題として、調査語を増やす必要がある。日常用語で調査を行うとより多くの可能性が観察される。ハルハ方言とチャハル方言からの借用語における相違点を調査するのも非常に価値のある課題であるだろう。

**参考文献**

- 白音門德.《蒙古语实验语音学研究》.内蒙古人民出版社, 2015。
- Fromkin, V., Rodman, R., & Hyams, N. 『言語学の視界』(梅田巖等訳). あぼろん社, 2002。
- Gordon, Matthew K. *Phonological Typology*. Oxford University Press, 2016。
- Kubozono, Haruo. Prosodic structure of loanwords in Japanese: syllable structure, accent and morphology. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 6, 2002。
- 清格尔泰.《蒙古语语法》.内蒙古人民出版社, 1991。
- 大江三郎.「日本語中の外来語における母音呼応」.『文学研究』66, 1969。
- 金正琳. チャハルモンゴル語の音声学・音韻論的研究:[博士学位論文], 神戸大学, 2023。
- 窪蘭晴夫.『日本語の音声』. 岩波書店, 1999。
- 国立国語研究所.『外来語の形成とその教育』. 大蔵省印刷局, 2019。
- 三間英樹. 「[空耳アワー]にみる音の類似と弁別素性」.『神戸市外国語大学外国学研究』87, 2015。